令和５年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第７号
（９月の発生予想）

令和５年８月 31 日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【大豆】

ハダニ類	量：並	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
マメシンクイガ	量：やや少ない	①　前年の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（－）
	【防除上の留意事項】 ９月の防除適期は第１～２半旬であるが、発生量や、薬剤の種類により時期や回数に違いがあるので、最新の「防除指針」を参照する。	
カメムシ類	量：やや多い	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　各予察灯のクサギカメムシの誘殺数は平年並。（±） ③　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）

【なし】

黒斑病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　８月下旬の発生量（発病葉）は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
黒星病	量：並 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　８月下旬の発生量（発病葉）は平年比やや少ないが中発生園地が認められる。（－～±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
	【防除上の留意事項】 ①　りん片への感染を防ぐため、収穫後から落葉期にかけて薬剤散布による防除を行う。 ②　秋期防除では薬剤感受性の低下を防ぐため、ＤＭＩ剤等の抵抗性のつきやすい薬剤の使用は避け、保護殺菌剤による防除を行う。 ③　発生園では落葉は放置せず、集めて土中に埋めるか、すき込むなどして翌年の伝染源量の低減を図る。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【なし】つづき

褐色斑点病 （西洋なし）	量：並 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　８月下旬の発生量（発病葉）は平年比やや少ないが、甚発生園地が認められた。（－～±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
	【防除上の留意事項】 ①　発病果、病落果は放置せず、園外に持ち出し適切に処分する。 ②　二次伸長枝は発病しやすいので、せん除して園外に持ち出し適切に処分する。 ③　秋雨期は重点防除時期にあたるため、散布間隔に留意し降雨前散布を徹底する。また、防除にあたっては薬液が新梢先端部まで十分かかるよう留意する。	
ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 （被害果率１～２%）	①　８月下旬のももの被害新梢率は平年比多い。（＋） ②　８月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は平年比やや多い～並。（＋～±） ③　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
	【防除上の留意事項】 ①　被害果は園内に放置せず、土中深く埋める等、適切に処分する。 ②　被害が見られる園では、９月上旬の防除を徹底するとともに、新高、新興等の晩生品種では９月中～下旬に追加防除を実施する。薬剤防除にあたっては、収穫前日数に十分注意する。 ③　スピードスプレーヤーによる薬剤散布は全列散布を行い、可能であれば縦横散布で防除し、かけむらのないよう留意する。	
ハマキムシ類	量：並 程度：少発生 （被害葉率１～15%）	①　８月下旬の発生量（被害葉）は平年並。（±） ②　主要加害種であるリンゴコカクモンハマキの８月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は中越地域で平年比多く、新潟地域は平年並。（＋～±） ③　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
クワコナカイガラムシ	量：並 程度：少発生 （被害果率１～２%）	①　８月下旬現在まで被害果は未確認で平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
カメムシ類	量：やや多い 程度：少発生 （被害果率１～２%）	①　８月下旬現在まで被害果は未確認で平年並。（±） ②　クサギカメムシ、チャバネアオカメムシの８月第１～第５半旬までの予察灯県内各地点の誘殺数の平均は、いずれも平年より多かった。（＋） ③　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【もも】

せん孔細菌病	量：やや少ない 程度：中発生 （発病葉率 11～30%）	① ８月下旬の発生量（発病葉）は平年比やや少ない。（－） ② 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
	【防除上の留意事項】 ① 夏型枝病斑発病枝や枯れ枝は早めにせん除し、発病した果実とともに園外に持ち出し適切に処分する。 ② 越冬伝染源量を下げるため、発生園では９月～10 月中旬にかけて、概ね２週間間隔で無機銅剤を２～３回散布する。 ③ 台風等で落葉した場合は、落葉痕からの感染が多くなるので、台風の接近や前線に伴う降雨の前に防除を実施する。	
モモハモグリガ	量：やや少ない 程度：少発生 （被害葉率１～５%）	① ８月下旬の発生量（被害葉）は平年並。（±） ② ８月下旬までのフェロモントラップの誘殺数は平年比やや少ない。（－） ③ 向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
	【防除上の留意事項】 収穫後にも園内を観察し、発生の多い場合は薬剤防除を行う。	

【ぶどう】

晩腐病	量：並～やや多い 程度：少発生 （発病果房率１～10%）	① 前年の発生量は平年並。（±） ② ８月下旬に少発生を認めた。（＋） ③ 梅雨期の降水量は平年より多く、感染を助長したと推測される。（＋） ④ 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
	【防除上の留意事項】 発病果粒は見つけ次第取り除き、二次感染の抑制を図る。	
べと病	量：並～やや多い 程度：少発生 （発病葉率１～10%）	① ８月下旬の発生量（発病葉）は平年並であるが、中発生園地が認められる。（±～＋） ② 向こう１か月の気温は高く（－）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ① 多発生すると早期落葉を引き起こし、樹勢が低下するとともに、落葉が翌年の伝染源となるため、発生がみられる園では、収穫後も銅剤で定期的に防除を行う。 ② 発生園では落葉は放置せず、集めて土中に埋めるか、すき込むなどして翌年の伝染源量の低減を図る。	
褐斑病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～10%）	① ８月下旬の発生量（発病葉）は平年比やや少ない。（－） ② 向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【かき】

円星落葉病	量：並～やや多い 程度：少発生 （発病葉率１～10%）	①　８月下旬に発病葉は未確認で平年並。（±） ②　前年の発生量は平年並。（±） ③　梅雨期の降水量は平年より多く、感染を助長したと推測される。（＋）
	【防除上の留意事項】 樹勢が低下すると発病を助長するので、適切な肥培管理を心がけ樹勢維持に努める。	
すす点病	量：並 程度：少発生 （発病果率１～５%）	①　８月下旬の発生量（発病果）は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
ﾁｬﾉｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ	量：並 程度：少発生 （発病果率１～２%）	①　８月下旬の発生量（被害果）は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
カメムシ類	量：やや多い 程度：少発生 （発病果率１～２%）	①　８月下旬の発生量（被害果）は平年比やや少ない。（－） ②　クサギカメムシ、チャバネアオカメムシの８月第１～第５半旬までの予察灯県内各地点の誘殺数の平均は、いずれも平年より多かった。（＋） ③　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
	【防除上の留意事項】 ①　カメムシ類の飛来量は園地間差が大きく、特に山林に近い園地では被害を受けやすいので注意する。 ②　園内でのカメムシ類の飛来や被害状況をよく観察し、防除は発生を確認したら早めに行う。 ③　カメムシ類は、夜間を中心に活動するため、早朝や夕方の薬剤防除で効果が高い。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【だいこん】

モザイク病	量：並 程度：少発生 （発病株率 1～20%）	①　前年の発生量は平年比少ない。（－） ②　８月下旬の発生は未確認。（±） ③　ウイルスを媒介するアブラムシ類の発生は平年並と予想される。（±）
べと病	量：並 程度：少発生 （発病度 1～15）	①　８月下旬の発生は未確認。（±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
黒斑細菌病	量：並 程度：少発生 （発病度 1～15）	①　前年の発生量は平年並で、伝染源量は平年並と推測される。（±） ②　８月下旬の発生は未確認。（±） ③　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
白さび病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病株率 1～20%）	①　前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推測される。（－） ②　８月下旬の発生は未確認。（±） ③　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
アブラムシ類	量：並 程度：少発生 （発生程度指数 1～50）	①　８月下旬の発生は未確認。（±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
コナガ	量：並 程度：少発生 （寄生株率 1～10%）	①　８月下旬の発生は未確認。（±） ②　８月のフェロモントラップの誘殺数は地域差があり平年比やや少ない～やや多い。（±） ③　向こう１か月の気温は高く（－）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。

【夏秋きゅうり】

べと病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～25%）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
うどんこ病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～25%）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
	【防除上の留意事項】 ほ場間で発生程度に差が見られる。発病葉は早めに除去するとともに、早期防除を心掛ける。	
褐斑病	量：並 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【夏秋きゅうり】つづき

アブラムシ類	量：並 程度：少発生 （一葉当たり寄生虫数１～10 頭）	①　８月下旬の寄生虫数は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
ハダニ類	量：並 程度：少発生 （寄生葉率１～２％）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
コナジラミ類	量：やや少ない 程度：少発生 （成虫寄生葉率 １～30%）	①　８月下旬の発生量は平年比少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
アザミウマ類	量：並 程度：少発生 （寄生葉率１～５％）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
ハモグリバエ類	量：並 程度：少発生 （寄生葉率１～25%）	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
ﾜﾀﾍﾘｸﾛﾉﾒｲｶﾞ （ウリノメイガ）	量：並 程度：少発生 （寄生株率１～20%）	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）

【秋冬ねぎ】

さび病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病度１～５）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高いと予想されている。（＋）
黒斑病・葉枯病	量：並 程度：少発生 （発病度１～20）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。（±）
軟腐病	量：並 程度：少発生 （発病株率１～５％）	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
ネギハモグリバエ	量：やや少ない 程度：少発生 （被害度１～10）	①　８月下旬の発生量は平年比少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
ネギアザミウマ	量：やや少ない 程度：中発生 （被害度 11～20）	①　８月下旬の発生量は平年比少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ①　薬剤防除は作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる薬剤をローテーション使用して抵抗性の発達を防ぐ。一部の薬剤に感受性低下が認められるので、最新の防除指針を参照する。 ②　収穫が近く発生が多い場合は、収穫 30 日前頃から７～10 日間隔で３～４回薬剤散布する。なお、使用基準の収穫前日数に注意して、薬剤選定する。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【秋冬ねぎ】つづき

ネギコガ	量：並 程度：少発生 （被害株率１～25%）	①　８月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
シロイチモジヨトウ	量：並 程度：少発生 （被害株率１～10%）	①　８月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　フェロモントラップの誘殺数は平年並からやや多い。（±～＋） ③　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。

【その他】

【野菜・花き類全般】 オオタバコガ	量：やや少ない～並	①　フェロモントラップの誘殺数は、平年比やや少ない～並。（－～±） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。
【大豆、果樹・野菜・花き類全般】 ハスモンヨトウ	量：並	①　フェロモントラップの誘殺数は、平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）と予想されている。

～　防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください　～

注１：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の５段階で表記しています。
②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。
注２：「予報の根拠」の、（＋）は発生量を増加させる要因、（－）は発生量を減少させる要因、（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～　農薬は適正に使用しましょう　～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：６月１日～８月 31 日】

○　農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
○　使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使いましょう。
○　農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
○　農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
○　水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後７日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

新潟県病害虫防除所業務課
電　話：0258-35-0867
ＦＡＸ：0258-35-7445
https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/

【参考】北陸地方　１か月予報（９月２日から１０月１日までの天候見通し）

（新潟地方気象台：令和５年８月３１日発表）

＜予想される向こう１か月の天候＞

・暖かい空気に覆われやすいため、向こう１か月の気温は高いでしょう。
・特に、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

向こう１か月の平均気温は、高い確率８０％です。
週別の気温は、１週目は、高い確率８０％です。
２週目は、高い確率８０％です。
３～４週目は、高い確率６０％です。

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　　温	１０	１０	８０
降 水 量	３０	４０	３０
日照時間	３０	４０	３０

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
１週目　　（９月　２日～９月　８日）	１０	１０	８０
２週目　　（９月　９日～９月１５日）	１０	１０	８０
３～４週目（９月１６日～９月２９日）	１０	３０	６０